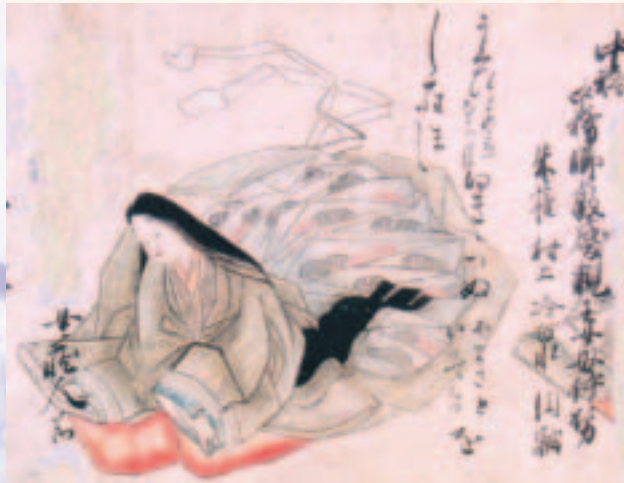


# 国文学研究資料館ニュース

No.2  
Winter  
2006



『三十六歌仙絵巻』

## 目次

■ ソウル研究交流集会……………2	■ 海外往来……………4
■ イベント情報……………3	■ トピックス……………5
通常展示	学术交流協定の締結
■ お知らせ……………3	人間文化研究機構連携展示
松浦家文書の寄託解除について	歴博・国文研 共同フォーラム
セルフコピー機の導入について	アーカイブズ・カレッジ
閲覧時間の延長について	連続講演
■ 寄贈・寄託図書等の紹介……………4	第29回 国際日本文学研究集会
松野陽一名誉教授旧蔵書	外務省「日韓友情年2005」事務局から感謝状
	■ コラム「日本文学を愛して」……………8

## ソウル研究交流集会

当館は昨年11月6日に、友好40周年を記念して、韓国ソウル市の中心部にある国際交流基金ソウル日本文化センターで、国際研究交流集会「行き交う人と文化—対話と旅—」を開催しました。集会は「講演」「研究発表」「シンポジウム」の3部構成で日本語を中心に進められました。



講演する李御寧氏

初めに榊原通紀ソウル日本文化センター長及び在韓日本大使館の挨拶に続き、第1部の「講演」では「韓日文化接触における“海”の発見」と題する李御寧（イ・オリョン）氏（梨花女子大学校名誉教授、元韓国文化大臣）の洋の東西にわたる該博な知識を駆使したスケールの大きな内容に続いて、松野陽一氏（当館名誉教授、前館長）が、金貞禮（キム・ジョンレ）氏（全南大学校教授）を通訳として、当館の海外調査に占める在韓国日本書籍の重要性を強調しました。

第2部の「研究発表」では、姜錫元（カン・ソクウォン）氏（東国大学校教授）が、上田秋成の朝鮮認識について、日本語の資料を紹介しながら、韓国語で発表し、続いて当館の伊井春樹館長が「リチャード・ゴードン・スミスの韓国旅行記」と題して、スミス自身の撮った写真を豊富に使いながら、1901年の短い訪韓の様態をたどったものを中心に発表しました。



研究発表する伊井館長

第3部の「シンポジウム」では、笠谷和比古氏（国際日本文化研究センター教授）・金貞禮氏・池田功氏（明治大学教授）・李漢燮（イ・ハンソップ）氏（高麗大学校教授）をパネラーとし、当館の松村副館長が司会となり、近世・近現代における両国の文化交流について、歴史・文学・言語といった角度から、活発・率直な議論（主に日本語）が行われ、会場からの質問を誘いました。

当日は天候にも恵まれて、約100名収容の会場が、様々な年齢層の入場者で埋まり、特に多数の若い方たちの参加は、集会を活気あふれるものとし、主催者側にとって何より喜ばしいことでした。



シンポジウムの風景



会場風景

### 表紙絵解説「三十六歌仙絵巻」

卷子本一巻。三十六歌仙歌人の位署・略伝並びに代表歌一首を記し、その左に各歌人の姿絵を描いたもの。料紙裏に金銀切箔を散らす。牡丹等唐草模様の緞子表紙、外題は題簽剥落、金布目地の見返しで、改装。内題・奥書等はない。江戸前期写か。万里小路藤房（までのこうじふじふさ）を伝承筆者とする藤房本系歌仙絵である。掲出した部分は、敦慶親王と伊勢の娘、中務（なかつかさ）。平安期の著名な女房歌人で、母と共に三十六歌仙に入る。

## イベント情報

### 通常展示

## 和書のさまざま — 書誌学入門 —

和書の形態を分かりやすく紹介する書誌学入門展示です。

第一部では「装訂」「書型」「本の各部」「料紙」について、  
第二部では「写本」「版本」「本以外の資料」について、  
具体的かつ体系的な解説を施しています。

基礎から書誌学を学びたい方だけでなく、和書を愛するすべての皆様に御覧いただければ幸いです。

日時：平成18年1月18日（水）～3月24日（金）  
10:00～16:30

場所：国文学研究資料館 2階展示室<入場無料>

## お知らせ

### ●松浦家文書の寄託解除について

北方探検家で、蝦夷地御用掛、開拓使判官を勤め、北海道の名付け親として名高い松浦武四郎の草稿・稿本類が中心の松浦家文書（807点）は、昭和29年度から目黒区にお住まいの直系ご子孫松浦一雄氏から寄託を受けていましたが、同氏の申し出により平成17年7月29日付けで寄託契約を解除しました。

寄託解除の理由は、武四郎の生誕地である三重県一志郡三雲町に、松浦武四郎記念館が平成6年に開館し、当館へ寄託されずに一雄氏宅で保管していた書簡・書画・美術工芸品（300点余）が、平成12年に同記念館に寄託されており、平成17年1月の松阪市との合併後に、同記念館の有効利用のために当館寄託分の一括寄贈の申し出があったためです。

また同記念館には三雲の松浦家（武四郎の実家）からも草稿・稿本類、書簡・書画や調度品が寄贈されており、武四郎関係資料が同記念館に集中保管されることになりました。松浦家文書の今後の利用については、下記にお問い合わせください。

お問い合わせ先：松浦武四郎記念館 電話：0598-56-6847  
〒515-2109 三重県松阪市小野江町383番地

### ●セルフコピー機の導入について

当館では利用者の要望におこたえして、平成17年12月1日から閲覧室にセルフコピー機を導入しました。

複写料金は1枚10円（暫定）です。

ご利用に際しての申込方法・複写手順等は閲覧室カウンターにお問い合わせください。

### ●閲覧時間の延長について

当館では平成17年8月1日から閲覧時間を18:00まで、複写受付は16:00まで、資料の閲覧請求は17:00まで延長しています。

閲覧時間 9:00～18:00

複写受付 9:30～16:00

閲覧請求 9:30～12:00 13:00～17:00

（いずれも月末を除く平日。詳細は当館ホームページ等で確認願います。）

## 寄贈・寄託図書等の紹介

### ●松野陽一名誉教授旧蔵書

昨年7月、当館前館長の松野陽一名誉教授から旧蔵書の写本、版本合わせて358点、746冊の寄贈を受けました。同氏の専門が和歌文学であることから、寄贈本は古代、中世、近世にわたる歌書が中心です。

版本は寛永15年刊『桐火桶』、宝永2年刊『歌道岸の姫松』他で、写本は『拾遺和歌集』『山家集』『貴布祢社奉納百首和歌』他。また、歌書以外の版本で特筆すべきは、近世中期の京都の浮世絵師西川祐信派の絵本が38点まとまって存在することです。その中には『絵本筑波山』『絵本玉かつら』、書名が未詳の逸題本〔開帳〕他、伝本の稀な珍しいものも含まれ、研究価値が高いものです。



西川祐信絵本『絵本筑波山』（享保15年刊）

同時に蔵書90点207冊の寄託も受けました。『千載和歌集』17点をはじめ、『古来風躰抄』『長秋詠草』などの俊成関係から、堀田正敦の『水月詠藻』、成島司直の『浦の浜ゆふ』などの近世和歌資料まで、同氏の専門分野の歌書が中心です。現在これらを併せ、広く利用していただくよう、整理を進めています。

## 海外往来

### ●日本文学国際共同研究研究会

昨年9月、当館の共同研究プロジェクト「文化情報資源の共有化システムに関する研究」では、日本文学国際共同研究第1回研究集会（International Collaboration for Japanese literary Studies Conference）を、イタリア（フィレンツェ市）で、開催しました。

この研究集会は、第29回イタリア日本研究学会会議（XXIX CONVEGNO di AISTUGIA）との共催であり、総合研究大学院大学文化科学研究科による学術交流計画にも位置づけられ、2名の学生が参加しました。



山下則子教授による研究発表

研究集会の目的は、各国、特にイタリアにおける現在のコラボレーション研究状況を整理し、相互の討議により共通認識を深め、評価を加え、今後の共同研究に資することでした。とりわけ、フィレンツェ大学、ヴェネツィア大学はコラボレーション研究拠点として、10数年に及ぶ連携を深めており、基本的な研究資源情報の収集、整理、公開が進み、さらに具体的に翻訳、注釈、引用分析などについてコラボレーション研究が進んでいます。

研究集会には、共同研究者（当館から8名、他大学など3名、イタリアから3名）を派遣し、5件の研究発表、1件のシンポジウムを行いました。特に、日仏伊を考慮したシンポジウム「海外における日本文学研究の方法と可能性」は、延べ80余名の参加を得、関心も高く、極めて内容の濃いものでした。

また、当館の伊井春樹館長による第29回イタリア日本研究学会会議の基調講演「源氏物語はなぜ現代も読まれるのか」は、由緒あるヴェッキオ宮殿500人広間で行われ、約200名の聴衆を得、極めて格調高く、盛会でした。

## トピックス

### ●学術交流協定の締結

昨年11月24日、当館は浙江工商大学（中華人民共和国）と新たに学術交流協定を締結しました。

協定書の調印は当館の館長室で行われ、浙江工商大学からは王勇日本語言文化学院長が訪れ、今後の研究者交流・学術情報の交換などについて、具体的検討が行われました。



王勇氏（左）と伊井館長（右）

### ●人間文化研究機構連携展示

「うたのちから—古今集・新古今集の世界—」

昨年は、最初の勅撰和歌集『古今集』成立の延喜5年（905）から1100年目、8番目の勅撰和歌集『新古今集』成立の元久2年（1205）から800年目に当たりました。

この記念の年に、当館は国立歴史民俗博物館と連携し、『古今集』から『新古今集』までの文学史をテーマに10月28日から11月18日まで特別展を開催しました。なお、当館の展示品のうち、懐風弄月文庫の約30点は初公開でした。

特別展では、図録・絵葉書の販売やギャラリートークの実施など、訪れた方に展示の古典籍を身近に感じていただく取り組みを行いました。

文学と史学は、研究としては全くの別分野と言われるほど離れた一面を持ちますが、人間文化研究機構では、人間文化を総合的にとらえなおそうと様々な取り組みをスタートさせており、当館でも新たな可能性に向けて今回の連携展示を開催しました。



特別展会場



ギャラリートーク風景

### ●ILL（図書館間相互協力）複写受付件数で当館が健闘！

平成17年4月から10月までのILL複写受付件数で、当館は総登録968機関のうち第44位、平成17年10月のみに限った場合は第16位でした。上位には大規模総合大学図書館等が名を連ねる中で、当館は小さいながら健闘していることが分かりました。

## ●歴博・国文研 共同フォーラム

昨年11月3日（文化の日）午後1時から、東京丸の内の東商ホールにおいて、連携展示「うたのちから」の一環として、歴博・国文研共同フォーラム『和歌と貴族の世界』を開催しました。

当館からは松村雄二副館長の「王朝和歌の転移—古今集から新古今集へ」、小川剛生助教授の「乱世の宮廷と歌人たち—南朝を中心に—」の2本の基調報告が行われ、歴博からは吉岡眞之副館長の「平安時代中期の国家儀礼と和歌」、井原今朝男教授の「中世儀礼における漢詩・管弦・和歌」の二つの報告が行われました。



会場風景

その後、吉岡副館長の司会による共同討議に入り、当日参加した296人の聴衆からの質問を受け止める形で、歌合を巡る制度的展開や、中世期における勅撰集の歴史的役割などについて、報告者間の討議が活発に行われました。歴史と文学の双方の側から初めて学際的な問題提起と掘り下げが行われたという意味で、第1回の連携フォーラムとして極めて有意義であり、しかも好評裏に終わったという点で成果の多い催しでした。

## ●アーカイブズ・カレッジ

本年度の短期コースは、11月7日～12日の期間で金沢市の石川県立歴史博物館を会場にして開催しました。

今回は、20都府県から34名が受講し、「アーカイブズカレッジ修了論文一覧」は、既に終了した長期コースと共に、『アーカイブズニューズレター No.4』に掲載する予定です。



講習の風景

## ●連続講演

当館では、平成12年度から毎年様々な作品を取り上げて、全5回の連続講演を開催しています。

今年度は「古今集から新古今集へ」というタイトルで、当館前館長の松野陽一名誉教授に講師をお願いしました。毎年この連続講演は人気が高いため申し込み制にしていますが、今回も定員120名に対して325名の申し込みがあり、急遽定員を200名に増やしました。



講演する松野前館長

講演は平成17年10月から12月にかけて、①「和歌史の中の古今集—仮名で書かれた「やまとうた」—」②「勅撰和歌集のテクスチャー—文芸構造体としての部立と配列—」③「小勅撰集と大組題百首—何を詠むか、如何に詠むか—」

④「歌学と歌論—俊成の和歌史観と方法—」⑤「新しい古今集—帝王と歌臣—」と題して行いました。一般の方に向けて勅撰集と和歌史の流れを説くお話の中に、和歌史研究の真髄や、学会最前線の成果が含み込まれ、会場は毎回熱気にあふれていました。

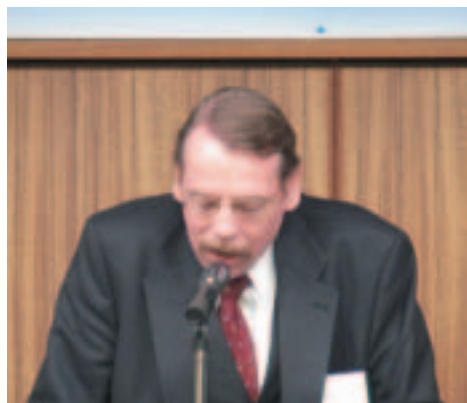
●第29回 国際日本文学研究集会

当館では、第29回国際日本文学研究集会を、平成17年11月17日・18日の2日間にわたって開催しました。

「海外から見た日本文学ー内と外をのりこえてー」というテーマを巡って、11人の研究発表、6人のポスターセッション発表とW.J. BOOT (ボート・ウリエム) 氏 (オランダ・ライデン大学教授) の公開講演といった、合計18人もこの発表・講演が行われるという、盛りだくさんのプログラムでした。

参加者は143人、そのうち海外及び国内に在住の15ヶ国の外国人研究者計45人が参加しました。会場における質疑応答は活発で、出席者に多くの刺激を与えることができました。

また、若手の研究発表や萌芽的な研究を奨励するためのポスターセッションの設置は日本文学の学会における初めての試みであり、多くの参加者から好感を持って受け止められたことも特筆すべきことでした。



講演するW. J. BOOT氏



会場風景

●外務省「日韓友情年2005」事務局から感謝状

この度、韓国ソウルで開催したソウル研究交流集会 (P2参照) に対して、外務省「日韓友情年2005」事務局から感謝状が届きました。

「日韓友情年2005」とは、日韓国交正常化40周年となる2005年に、両国の友情と相互理解を更に深める為、文化・経済・社会などあらゆる分野において交流を進め、21世紀を共に歩む日韓関係の礎を築いていくために企画された事業です。



コ ラ ム

日本文学を愛して

Bonaventura Ruperti(ボナヴェントゥーラ・ルペルティ)  
イタリア・ヴェネツィア大学教授

待ち憧れていたサバティカルである。一年間日本に留学し、自分の研究に専念できるのは夢のような心地であった。忙しさに追われたヴェネツィア大学での雑務づくめの生活から逃れ、イタリアを後にした。2004年の秋から2005年の夏まで、11か月外国人研究員として迎えてくださったのは国文学研究資料館である。

古木の鮮やかな緑につつまれ、古い池もある庭に臨む国文学研究資料館は、静かな住宅街に囲まれていた。季節とともに色彩、光陰、涼暖、寒暑の感じが変わり、梅、桜、枝垂れ桜、紫陽花、白百合などが咲く豊かな環境であった。はじめて国文研と縁ができたのはちょうど十年前のことである。その後、何度も訪れたが、今回ゆっくりと研究滞在ができ、嬉しい思いばかりであった。人間的にも温かい環境に恵まれた研究生活が始まった。イタリアとは到底比較にもならないような設備の研究室、それに、何よりも嬉しいのは、手の届くところに書籍（和古書、貴重書）、マイクロフィルムも含む膨大な文献が揃っていることであった。

そのおかげで、私の研究テーマ、近松門左衛門の浄瑠璃における謡曲からの引用の問題を中心に、17世紀の能文化、近世前期の俳諧と謡曲との関係などを心ゆくまで調べることができた。江戸版行謡本、小謡集、謡揃え、伝書、秘書、教則本、梗概書などの資料、特に「寛政7年能狂言書上」、「能評判うそ咄」、「謡曲画誌」などと出会えたのは嬉しかった。直接原本に触れる味わい深い体験ができるのは、外国で日本文学を愛し、研究している者にとって、最高の喜びなのである。

毎日自分の研究を進め、広げ、データベースを利用しつつ、文献を読む。辞典・索引などを引き、本文を照らし合わせ、論文を書く。誠に実り多い毎日であった。国際日本文学研究集会、シンポジウム、古典籍講習会、特別展示、連続講演、共同研究会など、相次ぐ中で、心の中が広がるような思いであった。

一番感激したのは、共同研究会という制度である。共通の研究テーマを中心に、館内の研究者と他の大学からの研究者が国文学研究資料館に集まり、選んだテーマを多方面から考えながら、発表したり討論したりする。活発な議論を交わす。私が代表になった研究会やその他の研究会にも参加でき、大変貴重な経験を積むことができた。

研究を犠牲にして毎日の会議・雑務に追われる現在の大学教員の身にとって、このように文学、演劇などの学問に、学問だけに専念できるという時間は、神々のアンプロシア（神肴）のようなもので、精神的に豊かに、まるで復活するような心地であった。

国文研は近い将来に立川に移ることになっているそうだが、今も懐かしく感じる戸越は、いつまでも私の心の駅です。



国文学研究資料館ニュース No. 2

発行日 平成18年 1月 17日  
編集 広報委員会  
発行 人間文化研究機構 国文学研究資料館  
National Institute of Japanese Literature  
〒142-8585 東京都品川区豊町1-16-10  
TEL:03-3785-7131 Fax:03-3785-4452 <http://www.nijl.ac.jp>  
印刷所 有限会社 スミダ

©人間文化研究機構 禁無断転載